
子猫のワルツ

兎紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子猫のワルツ

【Nコード】

N9039N

【作者名】

兎紗

【あらすじ】

私はただ知りたいんだ、自分がここに存在する意味を。主人公は、少々大人っぽいが特に目立つことの無い見た感じは普通の子。ただ、少し、純粹で無垢で無知なだけ。それでも、少女は新しい仲間に引きずられるようにして少しずつ自分なりに才能と勇気と人格を開花させる。

出会いのお話（前書き）

ハンター×ハンターの二次創作になります。
オリキャラが出てくるので注意して下さい。
これから、よろしくお願いします。

出会いのお話

『そう、簡単に試験管さんとか受験生の皆さんを殺されたら、困るんだけど、お兄さん』

コツコツと靴の踵を踏み鳴らしながら、

一人の少女がピエロ風の容姿の男に近寄っていく

「おかげで下手したら、試験が来年まで伸びそうじゃないの」

「おや、君は誰だい？」

「私？私は、シュナ、お兄さんは、確かヒソカさん、だよね？」

「正解、よく知ってたね♪」

ヒソカと名乗った男は舌なめずりをするように少女の全身を隈なく眺め見ると、微笑んだ。

「うん、君は、合格だ」

今年の試験は再開されたとしてもつまらないだろうし、だから、再開されたとしても試験への参加はやめてくれる？

それには非、来年、君と遊んでみたいからね」

「嫌、って言いたい所だけど、無理そうだね」

少女は男を軽く一瞥したあと、くるりと身を翻し歩きだした。

「またね、シュナ」

「私の方は、出来ればもう二度と会いたくないんだけど

まあ、いいや、バイバイ、ヒソカさん」

くすりと少女はもう一度男の方に体向けてから微笑し

素早くその場を後にした。

主人公設定（前書き）

話が進むにつれて
補足が色々つくと思います。
よろしくお願いします。

主人公設定

名前・シュナリギヴェン

性別・女

性格・何処か暗い影を背負っている。現実主義。

年齢に不釣り合いな態度をとることが多い。

笑うときは笑うし、泣く時は泣く、無論、怒るときは怒るし、喜ぶときは喜ぶが

何処か他人事っぽく、少しおかしい。（特に目立つ程ではない）

結構残酷、人を殺しても罪悪感を持つタイプではない、ただ、ある意味で純粹で無垢で無知なだけ。

年齢・16歳

容姿・明るい茶色の髪に深緑色の大きな瞳を持つ。

髪型は、ベリーショート。

服装は、黒色のチュニックに白色のパンツ、赤いラインの入った白色のスニーカー。

系統・具現化系↓とある修行により後天的特質系に変化する。

能力（試験編時）・ルービクキューブの6面に合わせて6の能力を使う。

赤の面〓この能力の中心部であり、弱点、破壊されると念能力が使えなくなる。

人を吸い込んだり、念を吸い込んだりなどはこの面で行えない。

黄の面〓相手をルービクキューブの中に閉じ込め、気絶させる。

黒の面〓相手の念能力を一時的に破壊する

（使用後、使い手自身が絶の状態になる、

相手の能力の大きさによって絶の期間は変わる）

緑の面Ⅱ使い手自身がルービックキューブの中に入りこみ相手の攻撃を防ぐ

（使い手が使用後一時的に幼児化する）

青の面Ⅱ相手のオーラを吸い取り強制的に絶状態にする。

白の面Ⅱ青の面で相手から吸い取ったオーラで傷を癒す（病は治せない）

武器・通常Ⅱナイフ or 竹刀、念Ⅱルービックキューブ

その他・赤ん坊の頃孤児院に預けられた後（）、

新しい親に引き取られ何不自由なく育つ。

しかし、物を買ひ与えることだけが愛情と思っている両親や利用され利用しだけの友人関係の中で成長したせいで何処か歪んでいる。

表向きはお父さんに言われて試験を受けに来た。

本当は、何故自分がここに存在するのかの理由を探す為にハンター試験を受けにきた。

追加

シュナの家族は全員ハンター。

主な仕事は仕事の仲介人。

一応シュナ自身はB級首のお尋ね者、ネットハンターに追い掛け回される日々を送っている。

家族は皆ライセンスを取得しているため、追いかけられない。

主人公設定（後書き）

主人公の性格は少しずつ変わっていきます。

ゴン達との出会いを通して

少しずつ少しずつ普通の少女へと。

緊張×ドキドキ×危機一髪

「えーと、ステーキ定食下さいー」

「焼き方は？」

「弱火でじっくり、のほほです」

1人の少女がとある店にやってきた。
ハンター試験を受けるために。

「お客さん、こちらへどうぞ」

「はい、ありがとうございます」

少女は、愛想よく礼を言ってから、店員の後に続いた。
店の奥には部屋の形をしたエレベーターがあった。
否、エレベーターが部屋の形？

「おなか減ってたんだよね、丁度よかった」

行儀よくステーキを食べ終わり口を拭いているうちに
少女は試験会場へとたどり着いた。

少女が受験プレートを受取った瞬間

ジリリリリリ

受付の終了を告げるベルの音がなり響いた。

「ただ今をもって、受け付け時間を終了いたします」
周りの空気が緊張という言葉で固まる。

「うわ、危なかった、ということは、私で最後ってわけね」
そんな中、少女は普通にああ、よかったと呟いた。

「ではこれよりハンター試験を開始いたします」

そうして、少女は、走り出す。
新しい出会いを見つけるために。

再開×憂鬱×急ぎ足

「いったい、何処まで走るんだろう」

「本当だよ、ただ走るだけって、つまらないよね」

「そうそ…お兄さん、また、きたの？」

私は、ただ走っていた。

一次試験の内容はとても簡単。

試験管のサトツさんについていくだけ。

「久しぶり、シュナ

それより、どう？つまらないし、殺らないかい？」

「あの、今の発音おかしくなかったですか？」

「ちょっとした、冗談だよ」

試験の内容はとても、分かりやすく確かに簡単だった。

けどさ、ゴールも見えない真っ直ぐな道を

ただひたすらに走るのって精神的に相当きつい。

なのに。なのに。

ピエロみたいな格好をした変なお兄さんに絡まれてしまった。
不幸すぎる。

「はあ、何でもいいですけど

私、凡人なので、近寄らないで下さい
私まで痛い視線浴びるんですけど」

「つれないね、別にいいじゃないか

それに、去年の試験で僕に堂々と話しかけた君は、
もう既に何かの武勇伝のように有名になっちゃってるから、
色々と諦めた方がいいよ」

「うわ、最悪です」

そうそう、そういえば、私、去年このお兄さんがあまりにもムカつ
いたから

文句言いにいったんだったつけど1人頭の中で回想してみる。

となると、そんな武勇伝を広めやがったやるーには、心辺りは一つ
しかない。

新人潰しのトンパ、あの人でまず間違いないだろう、うん。

というか、お兄さんにだけは、言われたくないよ、色々諦めるなん
て。

「まあ、そんなに言うなら今は、離れてあげてもいいけど

「じゃあ、またね」

そういうと、私の返事も聞かず一方的に前の方に向かって走っていった。

「はあ、私は、もう2度と会いたくないと去年も言っただけなんだから……」

1人、憂鬱そうな少女の声は、走る集団の足音にかき消され、静かな空気の中に溶け込んだ。

再開×憂鬱×急ぎ足（後書き）

えと、ここから、キャラ視点にしていきたいと思います。
ヒソカさんとしが、まだ絡ませられてないという；
すみません。

次はゴン君かキルア君を出そうと思っています。
よろしく願います。

こんにちは×生き物×不思議

『ねえねえ、お姉さんっ』

「へ？」

服の裾を引っ張りながら
お姉さんなんて、親しげに声をかけてくるなんて人物に私は心当た
りが無いのだが。

『お姉さんってばっ』

あまりにもしつこく服を引っ張るので
仕方なく後ろを振り向いてみた。

「やっと気づいてくれたっ」

：いや、そりゃ、服の裾引っ張られたら気づくだろ、普通。
という、突っ込みはしないことにした。

たとえ女性の服を引っ張るなどという相当失礼なことをしていると
してもね。

年下みたいだし。

「何？少年」

「俺、ゴン、お姉さん、走るの速いねっ」

まあ、とにかく、話しかけるしかないだろう。

そう、思い、話しかけたところ、きらきらつとした目で純粹に褒められた。

…何この子、生まれて初めてみるタイプだよ。

何の得にもならないのに他人のこと褒めるなんて、変なの。

「ゴン君ね、私は、シュナ

んでさ、走ることに関して、君の方が速いはずだよ

ほら、さっき、銀髪の子と前の方にいたじゃん？」

「！、シュナさん、俺のこと気づいてくれたんだ、ありがとうっ
何があるがとうなのかわからないが。」

というか、どうやら、この少年は、天然ものらしい。

「いや、お礼を言われても…」

「でも、本当に凄いや、

シュナさんの靴、凄く重そうだもん」

「！、何で？」

「えへへ、ほかの人と走るときに踏み出す足の音が違うから
キルアは、走ってても足の音が全然しなかったから、余計よく
分かったんだ」

にこりと無邪気に笑うゴンという名の少年。

初めて、見る種類の人間。

というか、そのときの私には、何か人間とは、別の生き物に見えた。

こんにちは×生き物×不思議（後書き）

後書き シュナの靴の底には錘が入ってます。

ゴン君出せました。

話あまり進まなくてすみません。

殺し屋×人形少女×対話（前書き）

更新してなかったです。

ごめんなさい！

殺し屋×人形少女×対話

適当に誤魔化し、ゴン君の傍から離れ、何時間経った頃
彼らの気配が近くから消えた。

どうやら、走っている人達の噂によると、
レオリオさんという人に何か問題が発生したらしく、助けに行った
らしい。

私は、悪いけどついて行かなかった。

距離が離れていたのもあるし、とあるチャンスを伺っていたのだ。

1人の少年とじっくりと話しをするチャンス。

「ねえねえ、君、キルア君、だっけ？」

「！、何」

気配を隠し近寄った私に

明らかに懸念な表情を見せる。

うん、可愛いな。

もちろん、ヒソカさんの意味じゃなくて！

「いや、とくに用はないんだけど
お話ししてみたいなーって」

「あつそ、ところで、お姉さん、何者？」

真っ黒な闇のような瞳に

伸びる爪。

なるほど、さすが、噂に名高い、例の一家の殺し屋だ。

「ああ、自己紹介がまだだったね
私は、シュナだよ、よろしくね」

「…そういう意味じゃないんだけど、
まあ、いいや、よろしく、シュナ」

「年上に呼び捨てとは、私はいいけど、誰かに怒られないように気をつけるんだよ」

そう言っている間にゴン君の気配が近くなってきたのを感じる。
そろそろ、離れるか。

「あ、私、用事思い出しちゃった、じゃあ、また」

「ちよ、」

そう言つて、軽く微笑み、引き止めるキルア君の声を無視して、その場を立ち去った。

2人が友達になれることを祈つて。

魔獣×命×ハント（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

更新遅いですが、ぼちぼちやっていきたいと思っています。
よろしく願います！！

魔獣×命×ハント

走り続けること、えーと、どのくらい経ったか分からないが
今、やっと、出口の光が見えてきた。

とりあえず、ほっと一息つく。

何せ、気がつく、この二人が私にまわりついて離れなくなっ
ていて、

基本、孤独を好む私としては、早く一人になりたかったのだ。

「やっと、出口だね！」

「シュナ、すっげえ、汗かいてるけど？」

「嫌味は、スルーするとして、

何で二人して、私にくっついてくるのかな…」

しかし、何でこうなった。

個人プレーで合格しようとか格好良いこと考えてたのに！

いつの間にか談笑しながら、走る状況になっちゃってるし。

出たら、絶対、ぜーったいに二人からは、離れるぞ！！

「だって、シュナさんと仲良くなりたいたももん！」

そんな私の心の声や表情に全く気づかない様子で

満面の笑みでそんなことをさらっと言ってくれるゴン君に

ああ、くそう、可愛いな、このまま、一緒でもいいかも…って、だめだめ

なんていう、甘い考えが一瞬出そうになる。

こんなの反則だ。

「俺はただの興味本位だけど」

それに対してにやりと嫌な笑みを浮かべるキルア君。

何この差は…。

精神的に疲れてきたとき

やっと、トンネルの中から抜け出せた。

が

「うわ、出れたは、いいけど、まだ、走るの?」

広いジャングルのような場所。

まだ、次の会場ではないんだろぅなということが軽く予想できる。
次の試験管いないし、小屋とか、それっぽいものもないし。

「うん、サトツさんが説明してるし、そうみたいだね!」

「シュナ、息切れてるぜ?」

「だから、君はどうして、こつも可愛げがないのかな!」

キルア君にムカつきつつも、
サトツさんが何やら、喋っているのを死にたくはないので、真面目に聞くことにした。

…サトツさん、魔獣がどうのこうの言ってる。

しかも、サトツさんを見失ったら最後死亡フラグがたつ的なこと言ってるし！

死ななきゃいいな、私。

と、思った瞬間

『嘘だ！そいつは、嘘をついている！！』

「ああ、面倒そうなことが始まった…」

いきなり、男の人が出てきて、自分が試験管だ！的なことを叫んだ。
てか、魔獣だね、あの男の人、たぶん。

動揺したみんながわめきあっているときに
サツと二枚のランプが宙を舞った。

「そっちが本物だね」

叫んでいた男の人の額にそのランプの一枚が突き刺さり
サトツさんの方はそのランプを軽く受け止めていた。
サトツさん、さすがだなあと思いつつ、ため息を吐く。

ヒソカさん、そろそろ、やばいのかな？

「次からはいかなる理由でも私への攻撃は試験管への反逆行為として、

即失格とします、よろしいですね？」

「はいはい」

サトツさんの注意を受けても、適当に受け流してるし。

スイッチ入ったっぱいかな、微妙に殺気も出てるし、できる限り、離れるか。

「二人とも、ヒソカさんには、気をつけたほうがいいよ

私、ちよつと、先行くわ」

二人にそれだけ忠告してから、

素早く鉛の入った靴を脱ぎ

靴から普通の運動靴を取り出し、履く。

鉛の入った靴は靴の中にいれた。

「ちよつ」

たんと地面を蹴り、走り出すと

案の定、後ろの方から悲鳴、というか、断末魔が聞こえてきた。極力サトツさんに近い位置で走ろうと冷静なことを考える反面ゴン君達のことがか心配でしかたがなかった。

手当て×お礼×照れ屋

前の方の早い組でとつと二次試験会場にっていた私は一人、木の下でペットボトルに入ったお茶を飲んでいた。

ゴン君達、大丈夫かなとか色々考えながら。

そんなとき、後ろから嫌なオーラが私に向けてぶつけられた。

「やあ、シユナ」

「ヒソカさん、話しかけてこないでくださいって言ってますよね？
…って、あえて聞きたくもないんですけど、その人どうしたんですか？」

「ちょっとね、彼は合格だ」

「色々の意味分かりませんよ

…あの、グラサンのお兄さん、大丈夫ですか？生きてたら返事してください！！」

「気絶してるから、当分起きないと思うけど」

何なんだ、このピエロは！

いきなり、何で男の人担いでる現れるの？

いや、この人が何かしたのは明白なんだけども。

「とりあえず、ほっぺ冷やさないと」

ヒソカさん、責任持つて、安全で冷たい水探して
このペットボトルに入れてきてください」

「仕方ないね」

「誰のせいですか！」

「はいはい？」

気持ち悪いわ！

数分後、あつという間に戻ってきたヒソカさんから、
水の入ったペットボトルを受け取った。
用も済んだので、ヒソカさんをしっしと追い払う。

「ハンカチに浸してつと」

ペットボトルの水をハンカチにかけ

男の人の頬に当てる。

腫れが早くひくといいのだが
というか、あれ、確かこの人、ゴン君と仲が良い人じゃなかったっ
け。

しまった、また、懐かれる！

「あ、シュナさんっ！」

と私が考えている間に

ゴン君達がやってきてしまった。
早く気がつけよ自分。

「レオリオ！シュナさんが、手当てしてくれたの？」

「いや、その」

「ん、う」

「あ、レオリオが起きた！！」

レオリオ、シュナさんが、手当てしてくれたんだよ！」

ゴン君余計なことを言うな。

が、しかし、レオリオさんは、どうして、自分が怪我をしたのかよく覚えていないいらしかった。

助かった。

「いやもでも、こんな可愛いお嬢ちゃんに

手当てしてもらったことは間違いねえんだ

助かったぜ！！」

「そ、そんな、たいしたことしてないですから！」

「私からも礼を言おう、ありがとう」

いやいや、だから、そんなにお礼を言われると

照れるじゃないか！！

「あれ、シュナさん、顔真っ赤だよ、熱？」

「ちちち、ちが、私はいたって元気健康やつほーって感じだから！！」

「？、なら、いいんだけど」

私が一人慌てふためいている間に
二次試験開始の音になった。

脱落？×動物×怖がりさん（前書き）

壊れたおもちゃを
直してみるのも
悪くはないか。

脱落？×動物×怖がりさん

「豚の丸焼き？」

「シュナさん、どうしたの？顔色悪いよ？」

「ごめん、私、帰る」

「ええ?!」

「トンネルどっちだっけ、あそこを通れば」

「早まるな、シュナ、おなかでも痛くなつたのか？」
急に顔色を真っ青にして

シュナさんは、首を横に振った。

「私、動物傷つけるとかって一切できないの」

「はあっ?!」

「人間と戦うとかならいいんだけど、
どうも、動物だと目が合うと感情移入して」

「意味分んねえぞ、お前！」
キラアが心底驚いたという風にシュナさんにそう言っても
ただ、シュナさんは静かに首を横に振った。

「とにかく、無理なものは、無理なの！

私は帰るから

みんな、頑張ってね」

「え？ちよ、シュナさん！」

振り返ることなく、シュナさんは、来た道の方に引き返していった。
ど、どうしよう。

「シュナじゃないか、何してるんだい？」

帰っている途中に待ち伏せていたかのように

ヒソカさんが豚さんで道を塞いでいた。

何この量は！

喋りたくはないが、無言で通らせてくれるわけもないだろうから答える。

「…何もないですよ、帰るんです」

「人は殴れるけど、動物は殴れない、とか言うんだろ？」

「そうですね、何か問題でもありますか？」

「ちょうどよかった

僕、気がたつててね、間違えて五頭ぐらいしとめちゃったんだ？
君の分も焼いてあげるから、持って行っていいよ？」

私の中で二つの選択肢が浮かぶ。

一、ありがとうございますと礼を言い素直に受け取る

二、借りは作りたくないので断る

…どうしようかな。

いい加減試験合格しないと、お父さんがうるさいだろうし。
仕方ない。

「ありがたく、頂戴します

借りはいつまでにどのようにして、返せばいいですか？」

「物分りが良くていいね、シュナは？

試験が終わったら、君と一度戦ってみたい、いいかい？」

「分かりました、ただし、場所はこちらで指定させてもらいます」

「了解

ちょっと、待ってて？」

面倒なことになったが仕方がない。

お父さんは絶対だから。

少女の瞳から

一瞬感情が消えたのを

奇術師は見逃さなかった。

空っぽ×同じ×心

「握りズシか、うーん」

二次試験のテーマはお寿司だ。

しかも、握りズシ。

修行しないと握れないんじゃないのか。

大体、ここ、海ないよ。

川の魚とか、ここ、ゲテモノしかいなさそうなんだけど。

仕方ない。

「すみません、メンチさん

この辺に、カメとかいますかね？」

「いると思うわよ？」

「そうですか、ありがとうございます」
それだけ聞ければ十分だ。

私は、一人、試験会場から飛び出した。

「カメ？」

「たぶん、卵がほしいんじゃないかしら？
スシ、知ってるっぽかったわよ」

「ああ、なるほど」

「カメさーん、どこですかーっ」

「…カタカタカタ」

「ひいつ、おお、お化け?! ご、ごめんなさい、静まってください
お酒ですか? それとも、油揚げ?、生き胆だけはご勘弁を!!」
我ながらに意味の分からない発言。
ていうか、よく見たら、この人服にプレートついてるよ!
失礼極まりないことしちゃったじゃないか!!

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい
私、目が悪いもので、いや、本当すみません
受験者の方だったとは気づかず」

「カタカタカタカタ」

いや、でも、わめいても動物は出てこないと思うよ。」
分かってるわ！見つからないから自暴自棄に陥ってただけだとは言えない。

逆らったら、容赦なく殺されるぞ、きっと。

だって、この人、怖いもん、オーラが禍々しすぎる。

「まあ、いいけど、いいよ、行つて」

「あ、う、」

「何？怖くて動けなくなつた？」

体を開放されたはいいものの、腰が抜けて立てなくなつてしまった。

「これだから、殺さないって面倒なんだよね」

「ひっ」

「でも、君は、たぶん、俺と同じだよ

立とうと思えば立てるはずだ

その、ごっこ遊びをやめたらね」

何を言われているのか分からない。

ごっこ、遊び？

殺し屋は見ていた

気づいていた

少女の身振り手振り、言動全てが

マリオネットが動かされているように、

何処か陳腐で

ばらばらだと。

嫉妬×人形×八つ当たり

「君さ、その目でナニを見てるの？」

ガラスでできたみたいな、その目で」

「は、い？」

「君、自分の意思で喋ってないよね？」

要するに、ただの喋る中身は空っぽの人形だって言ってるんだけど分かる？」

この人、何言ってるのと思う反面心が酷くざわついた。

何かが零れだしそうで

心の中にかけてあった大切な錠を容赦なく無理矢理壊されるようなそんな感覚。

「…まあ、どうでもいいけど

俺は行くよ」

男の人は一人歩き出した。

私は動けなくて。

ただ、その人の背中を見送った。

「ヒソカのお気に入り、アレ、完全に壊れてるよ?」

「知ってるよ」

「まあ、別に俺には関係ないけど
どうしたいわけ?アレを」

「人間にしたいんだ?」

「人間ね」

俺が言うのも何だけど、アレは欠陥品だ。
人間としての感情を持っているが
持っていない。

自分の意思で話していない。

話している相手が望む態度を取るように

アレは、そういう風な躰を受けたんだろう。
俺と同じように、いや、俺よりも明るく暗いところで。

「ならないと思うけど」

「じゃあ、賭けようか?」

「いいよ、暇つぶしに、俺が勝ったら、仕事手伝ってよ」

「分かった　じゃあ、僕が勝ったら、僕の仕事を手伝って?」

ヒソカは何を考えているのか。
俺にはやっぱり、理解できないな。

「あ、シュナさん！！大変なんだ、全員失格にするって、試験管の
人が

？、シュナさん？大丈夫？！」

「ゴン、くん、私」

「何ぼけつと突っ立って、おい、しっかりしろよ、焦点があつてな
い…？」

「何っ？！おい、シュナ、シュナ！私の声が聞こえるか？！」

「怪我はねえか？！」

訳が分からない。

何なんだあの人は。

私は、

『その目でナニを見てるの？』

『ガラスでできた目で』

『空っぽな人形』

頭の中をぐるぐる半数する言葉。

気がつくと涙が止まらなくなっていた。

「シュナさん！しっかりして、俺がいるから！！」

「あ、」

ごちゃごちゃの頭の中。

止まらない涙。

そのとき、そつと、

私の手に暖かくて柔らかいものがあたった。

そつして、ぎゅっと手を握られた。

ああ、これは、誰かの、手？

「よかった、やっと、俺の方を見てくれた」

「ゴン、君？」

ぎゅっと私の手を握ってくれたのはゴン君で。

すっごく心配そうに私の方を見てくれてて。

胸が温かいモノで満たされていくのを感じると同時に

ぷつんと何かの糸が切れたように私は意識を失った。

嫉妬×人形×八つ当たり（後書き）

イルミさんのは

キルアに似ているが

自分が闇人形として、育てたいのに言うことを聞かないキルアに対して

きちんと人形として生きることを守り育っている人形少女への
ただのらしくない八つ当たり。

仲間×優しさ×願い

「ん、う」

「あ、シュナさん、起きた？」

「ゴン君、あれ、私」

「びつくりしたよ、いきなり、倒れちゃうんだもん」

「本当本当、泣いたと思ったら、いきなりガクンだぜ？赤ん坊かよ」
明るく笑う少年二人。

あ、そうだ、私、森で変な人に脅されて、
それで

「私、どうしたんだっけ？」

全く思い出せない。

記憶喪失？

「はあっ?!、覚えてないのかよ」

「あのね、「ゴン、嫌なことがあったんだろっつから、無理に思い出させる必要はない」

「あ、ごめん」

「わ、気つかわせて、ごめんね、

私が覚えてないのがいけないんだから、気にしないで

迷惑かけて、本当ごめん」

しゅんとなったゴン君の頭を撫でる。

やっぱり、私、みんなと一緒にいない方がいいんだろうな。

誰かの側にいると、こういう風にいつも迷惑かけちゃうし…。

「あ、そういえば、試験、どうなったの？」

「ああ、色々あってな、時間がないから、省略するが、
先程の試験はやり直しになって、とある山で試験をするそうだ」

「そっか、色々ありがとう、私、お花摘んでくるね」

「お花？「ゴン、それ以上突っ込むな！」

わーわーと喚く楽しそうな声を聞きながら、

私は、トイレに行ったついでに、みんなの元に戻らないことにしようと思った。

このままだと、きっと、また、迷惑をかけそうだし。

寂しいけど。

って、何センチメンタルな気分陥ってるんだ！

しっかりしろ、私。

試験を受ける前から一人で行動するって決めてたじゃないか。

「あ、そうだ、シュナさん!!」

立ち上がりトイレに向かおうとする私に
大きな声で話しかけてくるゴン君が可愛くって。
思わず返事を返してしまふ。

「ん? どうかした?」

「俺もみんなも、全然迷惑って思っ
てないからね!」

そう言っ
て、満面の笑みを浮かべるゴン君。

みんなもこくりと頷いてくれている。

キルア君は、ちよつと、そつぽを向いてたけど。

「次の試験が終わって、時間が空いたら、一緒に遊ぼう!」
ゴン君があんまりにも嬉しそうにそう言ってくれるから
こっちまで嬉しくなってきた

「うん、いいよ」

トランプでもしよつか、鬼ごっこもいいかもね」
もう少しだけ

甘えててもいいかなって思ってしまったんだ。

仲間×優しさ×願い（後書き）

吹っ切れだした操り人形。

スリル×絶壁×死ぬ気で（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

とても有難い限りです。

駄文ですが、よろしければ、これからも見てやって下さい。
よろしくお願いします。

スリル×絶壁×死ぬ気で

「シュナ、震えてるけど、大丈夫？」

「えーとね、こういうときは、ひっひっふー」それは出産のときだ
！！」

「あれ、おかしいな…」

「俺がとってこようか？二個とるのも一個とるのも一緒だし、ね？」

「だ、大丈夫だよ、ゴン君、私は冷静私は冷静っ
えー、皆様。」

何やらシリアスなムードが破壊されて
私、只今、とある絶壁に立たされております。

何故かって？

試験管がクモワシとかいうこの絶壁の下に糸みたいなのを張って
巣を作ってる鳥の卵をとってこいっなんて言うんです。

ありえないんですか。

落ちたら、川ですよ、川、しかも、激流。
軽く死ぬそうなんですけど。

「残りは行くの？行かないの？」
メンチさんの問いかけ。

ゴン君達は私が落ち着くのを待っていてくれる。

これは、もう、飛び降りるしかない！

「もう、本当、大丈夫
私、いけるよ」

「そう？じゃあ、いつせーのっで、で降りよう？
俺が手握ってるから」
私の手をぎゅっと握ってくれるゴン君。
何か本当迷惑かけっぱなしだな。

「いつせーのーっでっ」

ビュンッ

と風を切る音。

何とか糸の上に着地し、卵をとる。
帰りはゴン君に手を離してもらって
下を見ないように崖を死ぬ気でよじ登った。

その後いただいた卵はとても美味しかった。

私もメンチさんと同じ道目指そうかなあと思うほどに。

飛行艇×ご機嫌×畏

「シユナさん、今から、キルアと探検に行くんだけど
シユナさんも行こうよ！」

「わっ、びっくりした」

「えへへ、ごめん」

可愛いなあ、もうっ。

二次試験終了後、私はさっさとシャワーを浴びに行った。
ネテロ会長の話も聞かずに。

だって、物凄い冷や汗かいたんだよ。

あのメンチさんに、あんた、早くシャワー浴びてきなさい！
って怒られたたぐらいなんだよ？！

ああ、怖かった。

で、ジャージに着替えて、シャワールームから出たら、何故かゴン
君とキルア君がいた。

しかも、ゴン君なんか、満面の笑みで。

「というか、お前、すごい格好だな」

「ジャージは基本だよ、キルア君」

「いや、そうじゃなくって、髪の毛、そんなのだったのか」

「んう？ああ、ワックス取れちゃったからね」

軽くドライヤーで乾かした髪は、跳ねっ毛を失い
今現在の私の頭はまんまるなボールのようになっていた。
さすがに、寝る前ぐらいいは落としておきたいんだが。

「変なら、ワックスつけるよ、待ってて」

「いや、別にいいけど」

「いや、キルア君ですら、あんまり突っ込まないってことは
やばいってことでしょう？すぐ、終わるから」

二人に断って、トイレでワックスを付け直す。

ぴょんぴょんと軽く髪を跳ねさせればいつもの私だ。
よし、おっけー。

「できたよ、ごめん、待たせて」

「うっん、全然！それより、早く行こうっ」

「どっから行く？」

「うーん、やっぱり」

「「操縦室！！」」

「え、ちょっと、二人とも怒られちゃ「行こう、キルア君」ああ、
臆病者は置いてくぞ」

待ってよつと言うゴン君の声。
その後三人で色々と回って怒られまくった。

「ふんふんふん、…」

「シュナさん？」

自販機のアイスを口に含み、ああ、もちろん、二人にも奢ってみた。
かなり気分もよかったんだけど。

何か向こうから、嫌なオーラが飛んできた。

この飛行船の中で念能力者なんて限られてるわけで。

「ごめん、何でもない」

触らぬ神に祟りなし、気づかなかったことにしよう。
と思ったら、引っ張られる体。

嫌な予感。

「やっぱり、ちょっと、ごめん、

おなか痛いから、トイレ行ってくる

ついでにそのまま寝るから、二人ともしっかり遊んでおいで」

「え？ちょ、シュナさん、…行っちゃった」

ゴン君ごめんよ。

私も好きで去るわけじゃないんだ。
何か体が勝手に引つ張られるんだよ。
たぶん、これは

「やあ、シュナ」
地獄が見えた気がした。
いや、マジで。

ピエロ×トラップ×胸騒ぎ

仕方ないので凝で体を見える。

うん、あった、背中にかかっていた。

紐？いや、くつついてるから、ガムか？

いやいやいや、念能力でガムって、たぶん、おかしいよ、ね？

えっと、伸び縮みしても切れないしゴムとか

でも、ゴムくつつかないし。

「^{バンジーガム}伸縮自在の愛って言うんだ」

「…そう、大っぴらに口にしていることなんですか」

「大丈夫大丈夫、シュナ、すぐ見破っちゃったみたいだし」

「え、いや、別に」

「さっきの口から出てたけど？？」

…私、ついに頭の神経もやられたか。

疲れたからかな、うん、きつと、そうだ！

「でも、やっぱり、シュナもアレ使えたんだ」

「…墓穴ほりました、ちょっと、トイレ」

「だーめ？、大体、アレ使える人なら、誰でも、分かるよ、精孔開いてるんだから」

「ああ、まあ、そりゃ、そうですね

で、疑問が一つあるんですけど、いいですか？」

「何??？」

「何で私にこんなつけたんですか？」

自分がどんどん墓穴掘りまくってるのは分かってる。けど、聞かすにはられない。

「暇なときに、遊んでもらおうと思って?」

「…そんな気はしました、

てか、私、今、寒気全開なんですけど、どうしたらいいんですかね」

「トランプでもしょうか　ばばぬきでいい？」

「人の話聞く気ないんですね!って、勝手にトランプ配りだしてるし…」

何が物悲しくてこの人と二人でトランプやらないといけないんだ。まだ、死にたくないぞ。

「ところで、さっきは、針の男がごめんね？」

「針の男？ああ、森で私を脅してきた人……」

「そう、僕の知り合いなんだ？最近いやな事があつたみたいでね？
八つ当たり半分だと思ってくれればいいから」

「八つ当たり、ですか、」

「そう？だから、気にしないで
でも、君、僕のことは恐がらないよね？」

…何か色々謎な会話だな。

八つ当たりで何か色々言われて、ゴン君達に迷惑かけたのか、私は。
おまけに、ヒソカさんのことを恐がらない？そんなわけがない。

「恐いですよ？」

「おや、素直だね、そういう子は好きだよ？
でも、彼から聞いたんだけど、

彼と話したとき焦点が合ってなかったんだってね
けど、ほら、今は、ちゃんと目を見て話せてる、
彼と同じ部類の僕を見てもね？」

「うーん、ヒソカさんは、言っても、まだ、
機嫌の良し悪しがはかれるって言うか
まだ、私のこと殺す気ないでしょう？
だからじゃないかな……」

自分でもよく分らない基準だが。

「たぶん、シュナは、根は肝が据わってるんだけど
まだまだ、経験不足なんだろうね

僕とは何回か話したから、大丈夫ってとこかな」

ね？とハートがつきそうな勢いで話しかけてくるピエロ。
じゃない、ヒソカさん。

何だかなあ。

私、もう少し自分自身のこと知ったほうがいいかもしれない。

「さあ、シュナから引いて、眠たくなったら、
僕が抱っこしてあげるから、寝ていいよ」

「死んでも寝ませ、！、…誰か死にましたね」

「ん？ああ、そうみたいだね」

「すみません、ちょっと、見えます」

何か嫌な感じがする。

「行っておいで、終わったら、また、きてね」

「嫌です」

「んー、つれない？」

私は急いでその場を後にした。

絆×闇×ぬくもり（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！
本当うれしいです。

これからもよろしくお願いします！！

絆×闇×ぬくもり

「キルア、君？」

「っ、シュナ」

彼の足元には死体。

彼の指先には血。

彼は、暗殺一家の男の子。

私の中で結論が出るのは早かった。

彼が殺したんだろう。

「俺がやったんだよ、恐いだ「恐くない」

「は？ちょ、おまつ、何」

私よりちよつとだけ背の低い少年を抱きしめる。

この子は、好きでやったんじゃない。

きっかけは、あつたはずだ。

「この人たち、キルア君に何か言っただんじやないの」

「俺がぶつかつたら、偉そうに謝れよとは、言われたけど
たった、それだけだぜ？それだけで俺は殺したんだ」

「子供だからってなめられてムカついたんだ、そりゃ、仕方ない」

「何が仕方ないんだよっ?!俺は」

「君がゾルディックの人間だってことを、私は最初から知ってた
それなのに、私がちゃんと、君の事を見てなかったのがいけない
ごめんね、キルア君

君、好きでこんなことしてるわけじゃないのに、

私が見てなかったから、嫌な思いさせちゃったね…」

抱きしめて頭を撫でてやる。

私ももう少し彼を見ててやるべきだった。

普通なら殴り合いだけですんじやうような喧嘩を

この子は、ぱつと手が出て、その後、自分の方が強かったら、

無意識に本能的に殺しちゃうだけ。

けど、その差は誰が見ても大きい、

彼の心にはどれだけ暗く尖ったものが刺さっているんだろう。

「何でお前が謝って」

「私の親、君に仕事を回してたんだ」

「は…?」

「正しく言うと、ゾルディック家に、

私のお父さん家族や使用人には、すごく優しいんだけど

ちよつと変わったハンターやっててね、

紹介屋っていうのかな、お父さん、情報屋やレアな殺し屋と連携
しててさ

うちの家にこんな情報がほしいとか、こいつを殺してくれってやってきた依頼主の代わりに連携組んでる情報屋やレアな殺し屋に仕事をお願いするの
そうすることで、依頼主の安全がより確実に取れるわけ、
それと、レアな殺し屋だと依頼方法がわからないから、まず家にくる人もいる

だから、ごめん、私は君に謝らないといけない」
全部本当だ。

だから、私が彼を見てないといけなかった。
とめないといけなかった。

「…ばつかじゃねえの」

「へ？」

「親が勝手にやってんなら、お前関係ねえだろ！！
何で謝ってんだよ、意味分かんねえ
ああ、しけたしけた、俺シャワー浴びてくるからな！」

「…じゃあ、キルア君も関係ないね」

「俺は実際に仕事やって「私も手伝ってたから、一緒」

「ああ、もう、分かった、分かったから！！
何なんだよ、お前、本当」
キルア君は何故か少し柔らかい表情をして
私のことを抱きしめ返してくれた。

「馬鹿だろ、馬鹿、ほら、お前も早く寝ろよ」

「あ、うん」

「途中まで一緒に行くぞ」

「へ？ちょ「早くしろよ」

無理やり拘束をとき、キルア君は、さつさと歩き出した。
少し顔が赤かったが、何でだろうか。

そうして、私は、シャワールームの前でキルア君と別れ
一人床で寝ようとした。
が、

「おや、シュナ、こんなところで寝てたらだめじゃないか」

「ヒソカさん、私、すっかりいい気分で寝ようとしてたところなんですけど」

「でも、女の子が一人で寝てたら危ないよ？
僕が見ててあげるから、こっちでおやすみ？」

「いや、結構で「じゃあ、抱「お願いします」
何て運の悪い。」

仕方がないので、ヒソカさんに言われるままに、二人がけのいすに

転がる。

まあ、いいや、こんな、ちんちくりんに何かしてくるわけもないだろう。

それに、確かに、攻撃してくる馬鹿もいるかもしれないし、多少安心して

私はそのまま眠った。

伝説×悪口×噂

「シュナ、ついたよ、起きて」

「んう？あ、ヒソカさん、すみません」

「いいよ、いいものも撮れたし、ほら？」

「…、へ？ひ、ヒソカさんのばかああああああああっ
！！」

あ、しまった。

みんなが引いた目で見る。

だ、だって、しょうがないじゃないか。
寝顔をばっちり撮られてたんだよ？！
そりゃ、油断してた私も悪いけどさ！

「やっぱり、アイツ危ないぜ？」

「可愛い女の子だと思ったのにな」

「あの、ヒソカに怒鳴るなんて、頭やばいぞ」

何か悪口みたいなのも聞こえてくるしね！

どうしてくれるんだ。

じーっとヒソカさんを睨みつけてみたが、効果はなく、楽しそうに笑われた。

よし、今決めた、そのうちぶっ飛ばす！いや、できる気がしないな、やめよう。

とりあえず、とぼとぼとゴン君達の元に戻った。

「あ、シュナさん！どうしたの？顔色悪いよ？」

「…ちょっと、ピエロと揉めたら、悪口言われて」

「ピエロ？ああ、ヒソカナ、そりゃ、しょうがないだろ
お前、あの、ヒソカにはかなんて喚いたんだぜ？」

「ここまで聞こえてたのか…」

「大丈夫！俺はシュナさんの味方だよ！」
ゴン君は可愛いのを。

それに比べてキルア君は、夜あれだけ心配してたのに、私馬鹿みた
い。

どうしよう、何か死にたくなってきた。

「わっ、何かシュナさんが白くなってるっ？！」

「ちょ、俺は、そんなことで今更引かねえから、戻って来い！！」

「…本当？」

「本当だったの、たくっ」

キルア君がぷいっとそっぽを向いた。

なるほど、どうやら、これは、彼なりの照れ隠しらしい。

「ゴン、キルア、シュナ、そろそろ降りるぞ」

向こうからクラピカ君の呼ぶ声がした。

「あ、早く行こう！」

「いつまで、そうやって固まってんだよ、早く行くぞ」
年下の二人に手を引っ張られ、

私はがっくりしながら、飛行船から降りるのだった。

落下×再び×悪寒（前書き）

ちよつと、これからの話を考えて
残酷描写ありに変えさせていただきました。
よろしく願います。

落下×再び×悪寒

現在、私は、トリックタワーと呼ばれる塔の上にいる。

で、肝心の試験内容は72時間以内にここから脱出しろだそうです。

ちなみに、この塔を下って降りようとした人は怪鳥に食べられました。

って

「どうやって、降りるの？」

「さっきの人食べられちゃったもんね、壁をつたうのは無理かあ」

「んー、何かあるはずたぜ？」

三人で辺りをきよきよと見回す、と男の人が何か地面あけて、降りていった。

「隠し扉か！ゴン、シュナ、さがすぞ」

「うんっ」

「はい」

キルア君もゴン君も楽しそうだな。

私はあまり楽しくないぞ、この下に何かあるのかを想像しただけで、寒気がする。

まあ、仕方がないので、隠し扉を探し歩く

「んー、何処か『ガコン』ガコン?、…きゃああああっ!」

「シュナ(さん)っ?!」

最後に二人の声が聞こえた気がした。

で、現在、私、急降下中でございます。

何かとどこころに

足が引つ掛けられそうな突起とか

穴とか、扉とかがあるんだけど

捕まるなり、入るなりしろってことだね、たぶん。
けどさ、この状況でできるか?!

《…よりによって、アレか》

「?、何か声がしたような」

『俺が五秒数えたら、右斜め下、に穴があるから、飛び込んで
は?え、ちょ

《5、4、3、2、1》

意味の分からないまま右斜め下にあると言われた穴に飛び込んだ。

「たす、かつた？」

『おめでとう、第一の試練

落ちる者と助ける者クリアだ』

落ちる者と助ける者？

私は一人首を傾げた。

『君たちには、これから、運命共同体になってもらう

どちらかが死んだ場合は二人とも失格だ

では、健闘を祈る』

「ふた、り？」

嫌な予感がして後ろをそっと、振り返る。

「嫌だけど、仕方ないね、早く立って、行くよ」
私を森で脅してきた針の男がいました。
死亡フラグ！！

パズル×名前×同業者

「針の人」

「針の人じゃなくて、ギタラクル」

「ギタラクルさん？」

「そう、早く行くよ」

さつさと私を置いて歩きだす、ギタラクルさん。

ああ、私、大丈夫かな。

「あの」

「何？」

「えと、針痛くないですか？」

「別に」

会話無くなった！

さつきから、こんな感じた。

確かに、この人、恐いし、おまけに、八つ当たりで脅されるし、すっごい苦手なんだけど、

こう2人つきりで何も会話がなひのは、ちよつと、きつい。
3日も一緒なのに。

おまけにさつきから薄暗い中

階段をギタラクルさんの速度に合わせて
物凄い勢いで階段駆け下りてるから

死にそう、内臓的なものが出そう。

そうして、しばらく、階段を降り続けると
目の前に扉が現れた。

『第二の試練は、パズルだ』

そう上から降りかかる声。

楽しそうで羨ましい限りだ。

『正し普通のパズルではない、まあ、見たまえ』
そう言い終わると同時に開かれた扉。
中には

「何これっ?!」

「大きいね」

物凄い大きさの額とパズルのピース。
小人にでもなった気分だ。

『ちなみに1ピース30kgある、ヒントは海だ、それでは、健闘を祈る』

試験管の声は途切れた。

よし、頑張れ、私。

パズルは得意だろ、頑張ってこの人に伝えるんだ!!

「あ、あの、ギタラクルさん」

「何？」

「私、パズルとルービックキューブだけは、得意なんです、

だ、だから、その、運ぶの手伝っていただけませんか？」
なるべく、下手に出る。

殺されませんように、怒られませんように！

「本当に大丈夫？」

「はい、そういう、訓練を受けました」

「ふーん、できなかったら、殺すけど、いい？」

「分かりました、協力お願いします」

ギタラクルさんが首を少しかしげた。
ど、どうしたんだろう。

「へえ、分かりました、ね」

「あ、あの、私何か？」

「別に、それで、どうするの？というか、君、30kgも持てる？」

「持てます、けど、その」

指示だけに徹底したい。

いや、でも。

「面倒くさそうだから、君は指示だけして、早くピース見て回ってくれる？」

「はい！」

何となく感じとってくれたのかな？

一人ピースを見て回り、記憶し、頭の中でパズルを組み立てる。
海だね、…よし、できた。

「絵柄はできました、端のピースから、とりあえず埋めてもらって
もいいですか？」

「うん」

記憶を頼りにピースをできた絵柄に当て嵌めてもらっていく。

というか、ギタラクルさん、凄すぎる。
軽々とピースを持ち上げ、凄いスピードで嵌めていった。

「これで、最後、…本当にできた、意外」

「あはは…」

何か、もう、笑うしかないよ、ね。

私、どれだけ、信頼されてなかったんだろう。

『！、早かったな、おめでとう、次に進みたまえ』

まあ、とりあえず、新しい扉も開いたし、よかった。
扉から出ると、また、階段だった。

ギタラクルさんの速さに合わせて、また、走り出す。

「君」

「へ、あ、はい？」

「名前」

「名前？あ、すみません、言ってませんでしたね、シュナ・ギヴェンです」

「仲介人の？」

「！、あ、はい」

「何だ、あそこの、ちょっと、待って」

いきなり、顔の針を抜き出したギタラクルさん。

うわ、エグい。

ていうか、何で私の家のこと知ってるんだろう？

陰でこそそやってるから、そんなに有名じゃないと思うんだけど。

「ふう」

「！、イルミ、さん？」

「知ってたんだ」

「写真で見たことは何度か」

お父さんの書類にキルア君共々貼ってあった写真で見たことがある。
というか、あの針、念能力、なのかな？

たぶん、そうだね？

「じゃあ、俺がキルの兄貴ってことも知ってるね？」

「あ、はい」

何故かすつと温度が下がった気がした。

オーラ×恐怖×貸し一つ

「キルト、友達になったりしてないよね？」

いきなり嫌な質問きた。

なったなんて言ったら、平気で殺る気だろうなあ。

「可愛いなとは思いますが」

正直、私、トモダチと違ってよく分かんないですよ

大抵私に寄ってくる人は

私を利用しようとするか陥れようとするかのどっちかだけなんで

てか、仕事上組む以外に利益あるんですかね？トモダチって」

これで、たぶん、お望みどおりの解答だと思うんだけどな。

どうだろうか。

まあ、半分本当のことだけど、友達は、ほしいけど、トモダチはいらない。

「なら、いいや、頭悪くなさそうでよかったよ
オレも仕事先の娘は殺したくはなかったし」

「そりゃ、どうも、あ、扉、ありますよ」

「シュナ、ちょっと、退いて」

トンと扉の前から押しのけられた。

いきなり、何するんだと思ったんだけど

扉が開かれると、そこには、何か大きな怪鳥がいました。
イルミさんが、押しのけてくれてなかったら、

「食べられてたよ、片方死ぬとダメなんだから、
今度から、無闇に扉の前に立つの、やめてくれる？」

「は、はい、ありがとうございま、す」

怪鳥恐いし

殺気満々のイルミさんも恐いし。

頭ごちゃごちゃしてきた。

『第三の試練はその鳥を殺さずに服従させること
健闘を祈る』

「こ、この鳥を？」

私は一人固まった。

というか、この怪鳥、扉の入り口から、何度も嘴で私たちを突こう
としてるんだけど

入ることすらままならないよね？これじゃあ。

「シュナ、気絶したら、半殺しね、生きてればいいんだから」

「へ？どういう意、っ」

すごい量の殺気とオーラ。

恐い恐い恐い。

頭の中でその文字だけが羅列されていく。

「よし、いい子」

しばらくすると、怪鳥は自ら、地面に座り込み

イルミさんに向かって頭を下げるような格好をとった。

服従、したって、ことだよな。

「シユナ、当てられても平気みたいだね、アレ使えるんだ？」

「へ？」

ぽんぽんと親しいものにでもするように軽く叩かれた肩。
けど、何か恐い。

『おめでとう、部屋を通って、進みたまえ』

「シユナは認められてないから、

たぶん、横通ったら、食べられるよ、自分でどうにかして」

「へ？っ、」

「試練自体は終わってるんだから、殺したっていいはずだよ？」
目の前の怪鳥。

イルミさんの無機質な声。

さてはて、どうしようか、念、は使いたくないし。
うーん。

「あ、そうだ」

「何それ」

「骨ですね、犬用の」

「馬鹿なの？死にたいの？」

「え、だめですかね？」

「はあ、…君が馬鹿なのはよく分かった」

イルミさんにため息つかれちゃったよ！

てか、無表情のまま、ため息ってム力つくな、おい。

「貸し一つね」

「は？え、ちょ」

担ぎ上げられた。

は？え、ちょ。

「自分で階段は降りて」

怪鳥の横を通り過ぎ、扉を抜け、階段の上に下ろされた。
え、えと

「ありがとうございます」

とりあえずお礼を一つ。

「別に、貸し一つ、忘れないでね」

何だかな、この人、よく分からない。

ヒソカさんの方がまだいいよな、感情はあるし。

勝負×キック×脱出（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！
夢みたいです。

駄文ですが、これからも、どうか、よろしくお願いします。

勝負×キック×脱出

そして、また、二人で階段を駆け下りた。
相変わらず無言だ。

『最後の扉だ、君たちには、今から、とある囚人二人とバトルしてもらおう』

用意ができたなら、ボタンを押すといい、扉が開かれる』

「よいしょつと」

「つて、この人躊躇なく押しちゃった！

ちょ、イルミさん、いきなり、襲ってこられたら、どうす」なら、前見てて」

独り言は口から漏れて

イルミさんには、殺気を向けられ。

どうしよう、段々死にたくなってきた。

「娘、我々は、そんなに愚かではないぞ」

「いきなり襲つたりなどしない、特に女子供にはな」

「ああ、そうですか、それは、すみません」

何か武術の達人風な人達出てきた。

でも、囚人なんだよね？

「試験管殿が言っていた通り、貴殿たちには、我らと勝負してもらう」

「勝負の方法は？」

「一対一のバトルだ、君達是我々二人を倒すと、ここから、出られる」

「なるほど」

「ルールは、相手をまいったと言わせるか気絶させるか、殺すか、だ」

「分かりやすくもいいね、オレから、行くよ」

ああ、うん、イルミさん、絶対殺る気だな。

見ないようにしようっと、と後ろを向いた。

しばらくすると、どさりと、何かが倒れる音がした。
きつと、相手の男だろうな。

「兄じゃ あああああああつ

女、お前、兄じゃの敵
いいいいいいいい
「

「いった、いきなり、襲わないんじゃないんですか！」

てか、私関係ないんですけど！殺ったの、イルミさんじゃないですか！」

「煩
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
つ」

男の人に刃物で腕を切られた。

はは、痛い、くそう、油断してた。

というか、この人達兄弟だったの、似てないな。

「覚悟しろ」

「私関係ないんだけどな」

刃物を構え向かってきた男を軽く避けてから、

後ろに回り、思いつき、脳天に蹴りを入れる。

やられたら、やり返すべきだよね！

まあ、私の靴鉛入りだから、どうなるか分からないけど！

「うっ、がつ」

「大丈夫、そのぐらいじゃ、たぶん、死にませんって、おやすみなさい」

ドサリ

と男の人は倒れた。

あれ、目開いたままなんだけど、大丈夫かな。

「シュナ、扉が開いたから、行くよ」

「あ、はい」

「あ、そうだ、キルには、オレのこと内緒ね？」

「はい、分かってます、殺されたくはありませんから」
そう言ってから、イルミさんの後に続いて外に出た。

『301番、ギタラクル、三次試験合格第二号、

406番、シュナ、三次試験合格第三号、共に所要時間』

何てアナウンスが流れているが

私は、そのとき、まともにアナウンスを聞くことができなかった。

だって

「やあ」

目の前にトランプタワーを大量に作っているピエロが!!
幻だ幻に違いない。

目を瞑って、端の方で体育座りでもしたら、夢から覚めるに違いない。

「よし、そうしょ、きゃあっ」

「酷いじゃないか、無視するなんて」

まだ、バンジーガムつけてあったのか!

体が無理やり引つ張られ、ヒソカさんの横に到着した。

あはは、死にたい。

「おや、怪我をしてるね、見せてご覧」

「いいで「じゃあ、膝の上に乗」「ごめんなさい、怪我診てください」
ヒソカさんの方がマシだなんて思った自分どっか行け!

そのあと、怪我の手当てをしてもらい、楽しいトランプ遊びに興じることになりました。

純粹×狂気×紙一重（前書き）

ちょっと、グロいかもしれません。

苦手な方は閲覧注意していただけると、ありがたいです。

純粹×狂気×紙一重

「また、負けた」

「ババのとき顔で分かるし」

「単細胞って言いたいんですか！イルミさんのバカっ
何かすっかり、和んでるトランプゲーム。
ばばぬき負けっぱなしだし。
いい加減嫌になってきた。」

ドンッ

そんなとき、近くの壁から鈍い音がした。
その音は何度も何度も続いた。

ドンドンッ

『すまない、囚人が逃げ出した
君達には、彼を捕まえてほしい、生死は問わない』
「は？」

ガンッ

試験管の声が途切れると共に
近くの壁が崩れ、一人の男が現れた。
目は虚ろだ。

「ヒソカ、よろしく」

「嫌だよ、あれ、死んでるだろ？」

「うん、死んでるね」

二人の暢気な会話。

しかし、その会話に私も納得せざる終えない。

だって、彼の目は完全に死んでいるのだ、何処も見えていない。

「わた、しを、ころして、くれ」

男はそう言った。

そうして、私は

(ヒソカside)

シユナはいきなり、すくつと立ち上がったかと思うと
その男の頸動脈を躊躇なくナイフで切った。

結果、男は、どさりと倒れ、しばらくすると、体から完全に力が抜けた。

死んだんだろう。

「シユナ、こっちにもおいで、僕が殺ればよかったね？」

ああ、可愛い顔が台無しだよ 今拭いてあげよう」

「大丈夫です、自分で拭けますか、きやうっ」

「服、着替え持ってないの？」

返り血で顔と首周りの服の部分が血まみれとなった少女を自分の膝の上に乗せる。

うん、いつもと何も変わらないシユナだ。

イルミですら、少し驚いた様子だったのに。

少女は全く気にしていない。

それどころか、不思議そうに、少し驚いた様子の僕らを見つめてきた。

（純粋な子だ）

殺すことを悪いことだとは教わらなかったのだろう。

少女の目には何の曇りもない。

殺してと言われたから、シユナは、殺した、何てことはない、ただそれだけのことだ。

しばらくして、その男の遺体が撤去された。

シユナは服を着替えると、いつもと変わらない様子で僕らに接してきた。

ああ、ゾクゾクする。

「ゴン君達、まだですかね？」

「きつと、くるよ」

あ、ほら、きたみたいだよ？」

シユナは、嬉しそうに、仲間の元に駆け寄っていった。

さっきまでの出来事が全て夢だったかのよう。

不運×落下×止める者

ふふふとどうしようもなく笑いが出てくる。
今にも涙が出そうだ。

やっぱり、二次試験の時点で帰るべきだった。
いや、今からでも、遅くないか、よし

「おい、シュナ、早まるな！ここは、海の上だ、最悪死ぬぞ！！」

「あ、ごめんなさい、クラピカ君」

海に飛び降りようとした私を必死で止めてくれるクラピカ君。
申し訳ない気持ちと絶望感で一杯の気持ちが混ざり合い
うう、と、どうしようもなくなって、甲板に屈みこんだ。

「全く、二次試験でも帰ろうとするし、
三次試験ではいきなり、隠し扉から落ちるし
今度は、海に落ちる気か？」

「う、ごめんなさい」

「あまりお前とは、話もしていないのに、こんなに目が行くとは
な、

こういうタイプの人間はシュナが初めてだよ」
クラピカ君に苦笑された。

本当ごめんなさいと心の中でも謝った。

「それで、どうした？ターゲットに何か問題でもあったのか？」

「うん、ちょっと、いや、やっぱり、だいぶ」

「何番だ？いや、言いたくないなら、別にいいんだが」

「クラピカ君達ではないよ、でも、命の危機を感じてる」

三次試験のあと、試験管によって知らされた四次試験の内容は狩るものと狩られるものになり

受験者同士でプレートを奪い合うという至ってシンプルかつ恐ろしいものだった。

で、その結果

「301番、引いちゃってね…」

運の悪いことに、私は、イルミさんの番号を引いてしまった。

引いた瞬間はポーカーフェイスを保つのに必死だった。

おかしいな、絶対何かの間違いだね。

「ああ、あの針の、

ん？確か、シユナは、三次試験、301番と一緒にだったとゴンから、聞いたが

試験のときに何かあったのか？」

「うん、まあ、その、あの人、すごく強いんだ、走るのも早いし」
死んでもイルミさんの番号を引いただなんて、バレないようにしないといけない。

そして、大人しく三枚プレート集めよう。
さもなければ、おそらく、消される。

「なるほど、しかし、だからと言って、海に落ちたら元も子もないだろう？」

流されるか、低体温になって、死んでしまうぞ」

「うーん、海の真ん中に放置されたことあるからなあ、たぶん、陸まで、泳げるよ」

「…海の真ん中？」

「ああ、いやいや、やっぱり、何でもない、そうだよ、死んだら元も子もないよね！」

あははと乾いた笑いが出る。

だめだめ、私はあくまで基本普通の女の子という設定なんだから。
特訓と称して海に捨てられたことなんて忘れよう。

「ああ、そうだ、死んだら元も子もない
シュナ、お互い精一杯頑張ろう、私はシュナには、試験に受かつ

てほしいと思ってる」

「クラピカ君…、ありがとう、私もクラピカ君には受かってほしい」

「ありがとう」

お互い微笑み合い、握手を交わした。

しかし、そのあと、クラピカ君と別れた私は
やっぱり、海に落ちようかどうか真剣に悩んだ。

別れ×声×挑戦者

「44番」

トリックタワーから出た順に船から陸へと降りていく。

私は三番目なのだが

ちょうどイルミさんの後だから、かなり、恐い。

表情に出すなと必死に自分に言い聞かせる。

「406番の方」

「あ、はい」

「シュナさん、気をつけてね！」

「怪我したら、オレを呼んでくれ、何処からでも駆けつけるぜ！」

「また、後でな」

「死ぬなよー」

元気いっぱい手を振ってくれるゴン君

ぐつとこちらに向けて親指を立ててくれるレオリオさん

それから、軽く微笑んでくれるクラピカ君に、

恥ずかしそうに軽く手を振ってくれるキルア君。

そんな、みんなが愛おしくて、絶対に落ちたくない、また、みんなと話したいと思った。

こんな気持ちになるのは、初めてかもしれない。

いつから、彼らのことがこんなに、愛おしくなったのだろう。
最初は煩わしくて、眩しくて、私なんかが傍にいたら、いけないと
考えていたのに。

今じゃ、離れるのが、こんなに寂しい。
トリックタワーのせいもあるだろうが。

「行つてきますっ!」
何となくしんみりしてきて、涙が出そうになったので、大きな声で
そう言った。

「……行つてらっしゃい」「……」
みんなの声を最後に背中から聞き、私は船から降りた。

自分のプレートは素早く
ルービックキューブの中に仕舞う。

そうして、のんびりと森を散策していたのだが、
しばらくすると、嫌な念を横から感じた。
ヒソカさんじゃない、これは、たぶん

「イルミさん、何かご用ですか?」

「あれ、気づいた？」

「気づいたじゃないですよ、私、丸腰なんですから、いきなり、悪意あるオーラを飛ばさないで下さい」
「なるべく、普通にいつも通りの抑揚で話す。
バレたら、まずい。」

「あのさ、シユナ、オレの番号引いたよね？」

「はい？」

「落ち着け落ち着け落ち着け。
大丈夫だ、とぼけるんだ。」

「嘘をついても無駄だよ、シユナ顔に出やすいから」

「…はあ、何がお望みです？私のプレートは生憎ですけど、先ほど蛇に食べられました」

「ふっん、で？」

「で？って何ですか、意味が分からないんですけど」

「プレートと交換に生かしてもらえんでも思った？」
「うわあ、嫌な予感しかない。
イルミさんの増える殺気にオーラ。
動物たちが騒がしくなっていく。」

「キルと友達になってないって言ったよね？」

「言いましたけど」

「じゃあ、あの、キルの態度は何？」

凄じ殺氣、オーラ、動物たちが逃げ出していく。

ああ、やっぱり、この人は絶対的強者だ。

怖い。

けど、二次試験の時みたいになるわけには行かない。

このハンター試験で手に入れたモノがたくさんあるのだ。
手放すわけには行かない。

「…恐がらないんだ、やっぱり、ごっこ遊びしてたんだね」

「恐くないわけじゃないですよ」

息を深く吸い込む。

よし、大丈夫だ、全然大丈夫じゃないけど、大丈夫だ！

「手合わせ願います」

何とか声を振り絞り、そう言って、震える足を無理やり踏ん張らせ、

微笑んだ。

引きつってたと思うけど。

戦闘×ガチンコ×一本勝負

「死ぬよ？」

「そのときは、逃げます」

「逃げれるといいね」

そう言つて、とんでくる針。

とりあえず、避けるが、それに乗じて、イルミさんが蹴りを繰り出してくる。

うわ、足が長いっていいな。

なんて、考えてる場合じゃないけど。

「念使えば？」

じゃないと相手にならないよ？というように感じてイルミさんが言うってくる。

うん、分かつてるよ、むかつくな。

「発動」

ルービックキューブを取り出し、素早く組み立てた。

「へえ、面白そう」

とか、言いながら、イルミさん、無茶苦茶棒読みだけどね！
あまり見せたくない能力を仕方なく仕掛ける。

「青の面発動」

普通念を使う人って技にかっこいい名前とかつけてるんだけど。私は一切つけていない。

どんな攻撃が出るのか、分からないようにするために。

「つと」

危険を察知されたらしく

イルミさんは、素早く、ルービックキューブから間合いを取った。
まあ、あれだ、無駄だ。

「シュナ、操作系？」

「さて、どうでしょうか、イルミさんは、操作系ですよね？」
着実に喋っている間もイルミさんのオーラを吸い取っていく。
イルミさんなら、すぐ、このぐらいどうにかしてしまうだろう。

「絶、にしたら吸えないみたいだね」
うん、やっぱり、すぐバレた。

「オレの番だよ？」

そう言うイルミさんは、無表情なのに、若干楽しそうだった。

さて、と。

現在

私は、イルミさんにフルボッコに合い
プレートを取られ、挽回するチャンスもなく
見事四次試験落ちました。

というか、よく生きてたな、私！

え、詳しく聞きたい？ごめんさない、もう二度と思い出したくない
です。

イルミさん、きっと力の五割も出してないぞ。

なのに、私の足は折れ、ついでに、腕まで折られてる。

どんだけ強いんだ、あの人。

「あなたも落ちたの？」

私が一人ぼけっとしていると

ピンクの帽子を被った可愛い女の人が話しかけてきた。
えーと、名前名前。

「あ、えと、たしか、ポンズ、さん？」

「そうよ、あなたは、確かシュナね、よろしく、も何もないけど」

「あはは、そうですね、でも、同じ女性がいてくれて、ありがたいです」

私たち、これから、どうなるんですかね」

「適当な所で降ろされると思っけど、あ、そうだ、それまで、話でもしない？」

「あ、はい、もちろん、喜んで」

それで、私達、四次試験脱落組は現在、飛行船の中だ。
何処で降ろされるのだろうか。

のんびりとポンスさんと話しながら

ゴン君達の電話番号ぐらい聞いとけばよかったと酷く後悔した。

決意×仲間×笑顔

『皆様、食堂の方にお集まりください』

「何かしら？」

「降りるのかな…？」

「シユナ、骨折れてるのよね？大丈夫？立てる？」
すっかり、ポンズちゃんとは仲良くなつて

敬語なしに話せるようになった。

のは、いいんだけど、いきなり、何だろう？

ポンズちゃんに肩を貸してもらい立ち上がり、食堂に向かった。

「今年は豊作ゆえ、少々もったいない者が何人も落ちてしまった
というわけじゃ、落ちた者にチャンスをやろうと思うと会長が
仰っています」

ざわざわと会場が騒がしくなる。

私もポンズちゃんと顔を見合わせた。

いきなり何だ？

「我々が独断的に、まだ、身体的な面で戦え
尚且つ、この人にはもう一度試験を受けると判断した

方を

「一次試験から四次試験の中から選ばせていただきました」

それじゃあ、私外れるな。

足折れてるし、手も折れてるし。

「今から、四次試験不合格者の中で、選ばれた方の番号と名前を呼びます」

次から次へと呼ばれていく名前。

ポンズちゃんも呼ばれていた。

とても、嬉しそうだ。

「406番、シュナ」

…は？

今何て言った？

「以上の方です」

私無茶苦茶怪我してるよ！

戦えないんだけど、バトルとか絶対無理。

「その方達には、今から、電話で会長と面談して頂きます」
それは、面談とは言わない。
じゃない、私に何をどうしろと言うのだ、会長に言っ
て辞退しない
と…。
戦えるわけがない、一人じゃ、動けないのだ。
が

「よかった、シュナも一緒なんて！」
ポonzちゃんが心のそこから嬉しそうな笑顔を浮かべて
私にそう言ってくる。
結果

「う、うん、私も嬉しい！」
と答えるしかなかった。
おい、こら、私、しっかりしろ。

一人一人電話で対話していく
ポonzちゃんが言うに、簡単な質問だけだそうだ。

そして、私の番が回ってきた。

「406番、シュナさん、部屋にお入りください」
会議室のような所に入り、黒服の男の人から電話を受け取った。

「もしもし」

『お、ギヴェンの娘さんか、わしじゃ、わし』

「新手の詐欺ですか、じゃない、私、戦えません、辞退したいんですけど」

『却下じゃ、それに、お主、念を習得していると見える、

自分の怪我を治す能力ぐらいいもってるんじゃないかと思ってるの』
会長さんをなめていた。

確かに治せる能力はある。

四次試験中にイルミさんから吸い取ったオーラを

ルービックキューブの白の面で治癒用のオーラに変換し
私の怪我に当てれば、骨折ぐらい、すぐ良くなるだろう。

ただ、イルミさんの粘着質で異質なオーラだ、あまり使いたくはない、むしろ、捨てたい。

『まあ、どうしても嫌だというなら、無理強いはせんが
405番の坊主達が悲しそうにしておったぞ』

「そんなこと言われると頑張りなくなっちゃうじゃないですか」
ゴン君達の笑顔が脳裏に蘇る。
会いたい、会いたい、逢いたいよ。

『どうするかのう？』

「…受けます、怪我也、ちゃんと治して」

『ほほ、それは、よかった、本試験会場で待っておるぞ』

「はい」

そうして、通話は切れた。
私、やらなきや。

もう一度みんなの所へ！

決意×仲間×笑顔（後書き）

最初はシユナには、何てことなく
四次試験を受からせる予定でした。

でも、何となく、それじゃいけない気がして
こういう話になってしまいました。

自分が分かりませんが、これでよかった気がします。

シユナが自分の意思で仲間の下へ行く、一番正解な気がしました。

ただいま×居場所×幸せ

「ここにいる皆様にはバトルをしていただきます

最終試験が終わるまでに、もし、この中で一人だけ、立っていたら

最終試験を受けていただけます」

選ばれた者達は

広い体育館のような場所に放り込まれ

敗者復活戦のルールを聞いていた。

相手を殺してはいけないこと

気絶させること

ルールは簡単だが

この人数の中で、最終試験が終わるまでに、一人だけになるというのは、中々難しそうだ。

でも、やるしかない。

「シユナ、お互い頑張りましょう」

「うん」

ポンスちゃんと微笑み合う。

と、同時に黒服の男の人がバトルスタートと大きな声で叫んだ。

（本試験会場）

「おい、あのハテナマークの枠は何だ？」

「ほほ、いい質問じゃの

実は「406番遅れましたーっ」

勢いよく扉を開き、会場に足を踏み入れると
全員が、こちらを見てきた。

痛い沈黙。

あれ、私、やつちゃった？

「シユナさん！」

「うわっ、ゴン君、久しぶり」

「どうしたんだ、お前、落ちたんじゃなかったのか？！」

飛びついてくるゴン君に

目を見開いて驚きわめくレオリオさん。

何だか、懐かしいなあ。

「こほん、早かったのう」

「いや、何かみんなして、女だからって、

私とポンズちゃんにはっかり、襲い掛かってくるから

ム力ついて、気絶させてるうちに、一人だけになっちゃって」

「なるほどの、ここにいる者たちに、今丁度説明しようとしていたところじゃ

さて、先ほどの続きじゃが、今年は豊作だったからの、敗者復活制度を設けてみたんじゃ

一次試験から四次試験で落ちた者のうち、

我々が独断的に、まだ、戦える、試験を受けさせる価値があると判断した者だけ、集めての、

最終試験が終わるまでに

一人だけ勝ち残れば、参加させてやるというルールで試合をしてもらった」

「一次から、四次って、中々の人数だぞ」

「そうじゃの、まあ、結果は見ての通り、時間内に戻ってきたわけじゃが

文句はあるかの？」

全員に凝視される私。

え、何、危険人物扱い？

ヒソカさんだけは、楽しそうに笑っていた。

「おかえり、シュナさん！やっぱり、すごいなあ」

「そうだな、すごいぜ、本当、シュナちゃんは、おかえり」

「まあ、何はともあれ、よかったな、おかえり」

「…おかえり」

嬉しそうにおかえりと言ってくれるゴン君にレオリオさん

苦笑とも取れる笑いを浮かべておかえりと言っクラピカ君
みんなにつられたのか何なのか、珍しく恥ずかしそうにおかえり
というキルア君。

そんなみんなの声が表情が
全部が嬉しくて、泣きそうになったから、目をこすって

「ただいま！」
笑顔でそう言った。

「ギタラクル、君、確か、シュナの腕と足、折ったって言ってな
かったかい？」

「カタカタカタ」

「そういう能力も持ってるんだろうねえ ああ、美味しそうだ？」

「カタカタカタカタ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9039n/>

子猫のワルツ

2011年12月31日08時51分発行